



▼このところ図書館の前で委託反対の署名活動をしている。中には素通りする人もいるが、ほとんどの人がちらしを受取り、そのなかの何分の一かは足をとめ署名してくれる。

委託について反対ばかりでなく賛成の意見を言う人、日頃の図書館サービスについて感謝を述べる人、不満を言う人、立ち話の気楽さからか、普段カウンターでは聞こえないような利用者の様々な声を聞くことが出来る。委託・民営化賛成のイデオロギーを持つ中年男性と口論のあげく、ついに反対運動に引き入れてしまったという例すらある。

ふと考えると意外にも生の利用者の図書館についての考えを聞く機会を持たないことに気がついた。懇談会などに出てくるのは、図書館運動をしているような覚悟ある市民ばかりで、一般の利用者とは、やはり違う。「市民の図書館」と言いつつ、私達は、普通の声をあげない利用者を大切にして来たのだろうか。まなじりをけつして、委託反対を押しつけるよりも、むしろ利用者の意見を聞く場と割り切ると、なごやかな気分になってくる。そして終わった後には充実感が残る。そんな日には署名も

増えている。

この闘争が終わった後でも、何か理由をつけて図書館前に立って利用者に話しかけてみたい気がするような、不思議で貴重な体験になった。「小形」

▼最近、家の洗濯機の調子が悪くって、コインランドリーに行くことが多いんです。家の近くには三軒のコインランドリーがあります。一軒は最新型の機械が導入されているけど狭くて席がない（いちいち帰れなくて古いんだけど夜遅くまで開いている、三軒目は新式の機械と旧式の機械の両方がある（とここまで書いて、なんだか図書館の比喩のような文章になっていることに気づきましたが、そんなつもりはありません）。それで、私は三軒めのコインランドリーによく行きます。なぜならそこには週刊誌や漫画雑誌が山と積まれているからです。で、先日行ったら、その山の中に図書館で除籍になった本が紛れていました。「ご自由にお持ちください」シールが貼ってあるアレです。膝を打ちました。銭湯とか喫茶店もこうすればいいのに、と。あ、でもそういうところで読むのは軽い内容じゃないとヤダな。「木村」

▼他人事ではないが、五、六年後の公共図書館の状況がどうなっているのか興味深い。これから数年の間に、合併、民間委託、指定管理者制度、行政評価制度、そして二化の進展等々の大きな変化の波が公共図書館を襲うことになる。今までの図書館運営論で通用するのか。公立としての図書館が存在し得るのか。また図書館の専門的職員の行く末は……と思いをめぐらす時間が増えている。図書館業務を受諾する民間企業は、力をつけてくるだろう。運営ノウハウも確実に習得し、中途半端な人事による公務員での運営よりも……という思いが頭をかすめる。「公共」と「公立」の違いを明確に認識する時期にきているのではないか。公立の図書館が目指してきた市民の図書館はあまりにも薄つぺらな土台の上に成り立っていたようにも思える。

しかしながら、自分が持つ知識、技術、経験が市民の役に立っているという実感もある。そして自分の持つ専門性は、一人ひとりの利用者との関わりで作り上げられたものだ。まわりが大きく変化しようとも地域との関わりから得た知識や技術、そして経験は変わることはない。そう考えると、やはり地域の住民と

ともにある図書館を追求したいと思う。その専門性を武器に公務としての図書館行政をまだまだ追求してみたい。「斎藤」

▼その業界では当たり前の話でも、別の人間が聞くととても面白いことである。今回の『すぼん』でいえば、「傷本」がそうだった。アンダーラインなどの書き込みからはじまり、写真を切り抜いたり、数ページを渡って自分のほしいページを切り取ったり、中にはカッターの台にされたり。

図書館に勤務するすぼん編集委員の面々は、「ああ、よくありますよ」とこともなげに話してくれたのだが、私や木村・沢辺は想像を超えた被害に大笑いしてしまった。それで今回の「傷本」の企画が生まれたのだが、仮タイトルは「いたずらされた本たち」だった。気に入っていたんだけど、こままた図書館勤務の編集委員から「やっているほうは、いたずらじゃないんだよね。ある意味、真剣に読んでいる」ってなことをいわれ、納得。それで、「傷本」に落ち着きました。次回も「傷本」と同じようなテーマで、すつこく楽しいネタを予定しています。これも図書館業界の人には、珍しくもないネタ



のようなんだけど、「世の中にはいろんな人がいるなあ」と愉快になる内容です。お楽しみに！「佐藤」

▼「ビジネス図書館ってうさん臭いと思うんだよね」と思わず口走ってしまった。そしたら編集委員のメンバーたちに少し反感(笑)を持たれた気がした。図書館「業界」ではここ数年の流行なんだからしょうがないな？で、僕の理解がまちがってなければ、「ビジネス図書館」といつても要は「レファレンス」だよ。広辞苑でひいて見たら「文献の紹介・提供などの援助。参考調査業務」。ビジネス支援図書館って、販売に関する資料の提供・援助っていうことだと思ふ。僕が「うさん臭い」って感じるのは、わざわざレファレンスを「ビジネス図書館」っていかせていること。アメリカ流の市場経済・市場原理優位日本型経営ダメダメ説↑ほんとにダメかよ？で、ベンチャーだとか起業がはやってるからそれに乗っかって客増やそうってやってるように思える。そうだとしたらカッコ悪いよ。

「奥付」の記事のなかで、著者・石田さんは、いろんな本を調べ、現物の本を求めて図書館にいったけど、一度もレファレンスか

ウンターに調べてもらってない。それどころか、閉架の棚を直接見たい(つまりレファレンスに頼まず、自分でやらせてくれないかな)といっている。なぜなんだ？レファレンスが見向きもされなかった理由は？そのあたりのところから、レファレンスのこと、さらには図書館が何を利用者に提供するのかが、もう一度考えてみるのがいんじゃないだろうか？

つてことで、次号特集は「レファレンスやろうよ」って編集委員のみんなに提案してみよう。書店員との座談会で思ったのは、結局僕らはやってほしいことをサービス提供者に伝えられていないんだってこと。それってある種の苦情だから、相手から嫌われそう、伝えること自身をやめてしまっていると思ふ、僕らは。で「本屋さんは○だよ」って噂ばかりが流通する。それって「図書館で○○だよ」って決めつけと同じパターンじゃないだろうか？「沢辺」

▼本誌を創刊したのが一九九四年の七月だから、一年と五か月の間に一〇冊発行したことになる。私は創刊当初から、本誌が「粕取り雑誌」になってしまったことを予測し、そのことを第

三号の編集後記にも書いた。しかし、私の予測は見事に外れ、遅々とした歩みではあるがようやく一〇号まで発行に漕ぎ着けた。実に感慨深いものがある。「粕取り雑誌」という言葉は、もはや死語になっていいると思われるので、蛇足ながら解説すると、三号で潰れる低俗な雑誌のことである。戦後、「粕取り焼酎」という粗悪なアルコールが出回り、大抵三合で酔い潰れたことからの語呂合わせである。だから、三号まで発行したときは「粕取り雑誌」の仲間入りが果たされたことになり、四号の発行で「粕取り雑誌」の称号を返上したのである。

この間、編集委員も何人か入れ替わったため、創刊時からの編集委員は、出版社の二名を加えても七名になってしまった。編集委員といっても、最近は一ヶ月の編集会議に出席するのが精一杯で、事務的な作業は出版社にお願いすることが多くなっている。

一年余りの時の流れは、図書館やそれを取り巻く環境を大きく変えてもいる。委託問題ひとつ取ってみても、公社や財団委託から、カウンターの一部委託、指定管理者制度とめまぐるしく変化している。委託の受

け皿として、ZPO法人が登場するまでになった。自分の職場を見ても、本体業務の委託こそないものの、常勤職員と臨時職員が若干減り、非常勤職員が大幅に増えているなどの変化がある。

ところで、本誌の存在理由であるが、図書館やメディアを取り巻く状況にどこまで切り込んでいくか、常に問われていたと思うし、私自身も問い続けてきたつもりではある。「す・ぼん」ならではの誌面づくりができていく限りは、発行し続ける意味があると思う反面、最近ではしんどさの方が先に立ってしまうことも多い。現役の図書館員でいられる内は、何とか編集委員を続けたいと考えているが、果たしていつまで緊張感を維持できるか自信はない。緊張の糸が切れたとき、取り上げる主題から切実さが失われたとき、私と『す・ぼん』の関係は終了することになる。「手嶋」

▼今夏、私の勤務する大学で二名の教員が解雇され、四名の教員が停職一四日、一名の職員が戒告処分された。理事会は、「冬の時代」を生き残るための学院の方針に反対し、妨害したからという。現在、地位保全の仮処分を申請し、組合も解雇撤回を



求めているが、理事会はかたくなな姿勢を崩していない。卒業生で牧師の理事長は、イエスは「平和ではなく、剣をもたすために来たのだ」(マタイ一〇―三四)と嘯き、ことさら「危機的状況」を煽り立てている。いうまでもないが、聖書の文言から自分に都合のよきような箇所など、探せばいくらでも見つかる。現に、同じ、マタイ伝に、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ二六―五二)という文言もあるし、「敵を愛しなさい」(マタイ五―四四)も、「人を裁くな」(マタイ七―一)もある。私は、学生時代を含め、かなり長くキリスト者と付き合っているが、こんなご都合主義者には何れもお目にかかっている。だから別に驚きはしないけれど、人の首を切るのに、聖書の文言を引用する狡猾さには腹が立つ。実をいえば、私は今年の創立記念礼拝式で勤続三〇年の表彰状と記念品(一〇万円相当の腕時計)をこの理事長から授与されることになっていたが、丁寧にご辞退申し上げた。

こんなそんなで、あ、台風も図書館大会もあったし、で、今回は編集にも執筆にも参加できませんでした。ゴメンナサイ!

次号はぜひ!「東條」
▼大変面白い本を読んだので紹介したい。「図書館で考える道徳——書き込み被害をめぐる」
という。著者は諸橋孝一、出版社は鳥影社、発行は二〇〇一年、奥付の上の著者紹介によると四十代で、創作ものらしい著書が一冊ある方のようにだ。頻繁に図書館を利用して、蔵書への書き込みの多さが気になった諸橋氏は、利用者の側からこの問題を調査・分析してみようとする。東京二三区の区毎に、類似の水準の図書館を一館ずつ選んだ。各館を訪ね書架の前に立ち、ZDC分類の各「類」から五〇冊を選びバラバラとめくっては書き込みの有無や特徴を記録し分類していく。この本はその調査結果を中心に、書き込みをめぐる考えたこと、図書館に通いつめる中で見たもの、聞いたこと、公衆道徳の考察などで成り立っている。

図書館員として日々を過ごしている者にとっては、ソウソウそうなんだよ、とうなずく事が多く、手間隙かけて多くの館に出かけ件数を集め分析する努力にはただ驚く。けれど自分の好みの本を選ぶわけではなく集中的に通う中で、諸橋氏は図書館の蔵書ばかりでなく、図書館内に集

う人々のヘビー・ウォッチャーになっている。職員にとってはありがたい奇書という気がする。

「道徳」の語は現在ではそれを使つたとたん、思考があるパターン内から伸びて行けない、使いたくない言葉だと思ふ。氏の考察も「公衆道徳」をめぐる一般的な思考はそう新しいものではない。ただし、大勢が好んで利用し「公共性」をめぐる現代生活者の意識と行為の堆積場所として図書館フロアと蔵書をウォッチする視点と考察は、職員の間で引き継がねばという感想も持った。

松岡享子著「サンタクロースの部屋」から再引用された「共同」でものを所有することに、自らもあずかる感じを与える」というフレーズが気に入っている。二三二ページからの「共有への最適な参加」という節の中で紹介されているのだ。著者でも出版社員でも書店員でも経験できない、我々図書館員だからこそ立ち会える面白みと誇りを表現してくれているように思う。「道徳」といつても「こうあるべき」というよりは「共同性への参加の快楽」という視点。おおげさなことではなく、日々カウンターで出会う善男善女の顔を思い出

しながら。「堀」
▼「屈託のなきさうな」生徒の振る舞いを観察しながら棲息している、高校司書という立場に満足しきっている。そんな怠惰な私は自分の仕事について「反省」などということなど毛頭感じていない、彼らの悩み多き青春などと無縁に。

ところで、最近の高校の卒業アルバムを見たことがありませんか? 生徒のアルバム委員が作るクラスのページはかなり自由になる。この数年のことと思われる現象なのですが、そのページには隙間が見えできない。空白がない。様々な写真が貼りまくられ、空白が生じると悪魔が忍び込むかのように、丹念に空白が埋められている。どのクラスもスナップ写真満載のカラージュができてあがっている。これって、プリクラと同じ感覚かもしれない。

さて、そんな彼らに私はどんなサービスを提供すれば満足してもらえるのか、日々熟慮。けれども、たぶん何をしても満足してもらえそうもない。と、勝手に決めつけて自己流大展開したいのだけれど、狭い閲覧室・カビ、ポロボロ本が満載の書庫・窓なし司書室に悪戦苦闘中。ああ、疲れた。「真々田」